

『主体の論理・概念の倫理』
上野修・米虫正巳・近藤和敬編著

以文社 四六〇〇円

一九四四年にレジスタンスの闘士としてドイツ軍に処刑されたジャン・カヴァイエスというピースをはめ込むと、まるでそれがミッシングリングであったかのように、多様な二〇世紀フランス思想の巨大なタペストリーの図柄が鮮明になり、そこに一つの方向性が見えてくる。

それは、〈主体〉を人間の〈超越論的〉意識に還元或いは同一視するデカルト、カントから現象学、実存主義へといたる近代哲学の太い潮流に抗して逆流する方向性である。そしてタペストリーのあちこちに織り込まれた、三〇〇年前のスピノザの思考が浮かび上がってくる。

「新たな概念の創造が問題を解きつつ、ほかの概念の意味を改訂していく」。カヴァイエスは、数学の〈生成〉についてこう語った。生命 \parallel 概念と見るカンギレムら彼に続く哲学者たちは、概念を意識の対象（産物）ではなく、世界そのものを創り、変えていくものと捉えるのだ。人間の行動もまた、自由意思の決断の結果ではなく、概念の必然性が導いているのである。

そうした思考はすぐにラカンの精神分析を想起させるだろう。そして二〇世紀のフランスの哲学者たちの多くが、自身政治運動の担い手でもあった事実を、明確に説明してくれる。

本書の意義は、哲学プロパールの領域を超えて拡がっていく。ここに展開される概念・主体・生についての議論は、計算能力の急激な発達と処理データの膨大な蓄積によって人工知能が「人間そっくり」になり得るのかが問われる際に、大いに参照されるべきだと思ふのである。（フ）